

# 〈報告〉米ワシントン大学における中国研究の現況について

## A Report on the Present Status of Chinese Studies at University of Washington, U.S.A.

池上 貞子\*  
Sadako Ikegami

### はじめに

日本における中国研究は、従来、地理的歴史的條件、およびそれらに由来する特別な親近感によって、日本と中国のみの関係を主軸に考えられがちであった。しかるに、現代中国文学について言うと、80年代半ばから、中国で積極的に推進された対外開放政策の影響によって、同時代の中国の文学者の作品のなかに、欧米文学の手法や考え方の影響が顕著になってきていること、政治事件に関連した亡命も含め、こうした人々が欧米諸国へと移動して実際の文学活動をしているという現実など、もはやこの二者の関係だけではとらえきれなくなっている。そして、もともとおなじ中国文化圏にある香港や台湾は、イギリスやアメリカなどと関連が深く、欧米への留学や研究者の流出は、知識層の一部ではさほど珍しくもない現象だったのである。

筆者の場合、このところ研究テーマとしている作家張愛玲(1920～)が、中華人民共和国成立後、香港を経て現在アメリカ在住であるうえに、中国大陸が鎖国状態にあった間、彼女の作品がアメリカにいる中国系の研究者によって評価され、大陸外で読み続けられて、開放政策以後は逆輸入の形で大陸で読まれ、研究されるよ

うになったという状況がある。このようなわけで、中国大陸以外での現代中国文学研究、とくにアメリカでのそれについて、深い関心をよせざるをえない。

夏期休暇中、筆者はシアトルにあるワシントン大学での滞在を利用して、アジア関係の図書館で資料の閲覧・収集を行ったり、関連学科の教授にお会いして、同大学での中国語および中国文学の授業に関する話をうかがうことができた。これらとともに、カリフォルニア大学ロス・アンジェルス校や同大学バークレー校の図書館で収集した資料も参考にしながら、アメリカの大学における中国研究教育の一例をここに紹介する。これは、主には筆者の今後の研究方法の多様化や、研究課題の拡充の基礎作りを意図したものであり、やや普遍性に欠ける可能性があることをあらかじめお断りしておく。

### 1, ワシントン大学

ワシントン大学は、アメリカ西海岸ではもっとも伝統のある大学で、1861年に創立。同じ州立ではあるが、英語名は University of Washingtonで、ワシントン州立大学(Washington State University)とは区別される。

学生数は学部生だけで25000名近く、総数で

\*一般教育等

は30000名以上にのぼる。教授陣は3000名余。マイノリティの比率は20数パーセント。学生はワシントン州出身者が中心だが、州外からの学生も増加している。保健、医学関係、とくに看護学は全米でも屈指と言われる。経営学、国際学科なども定評があるようだが、ユニークなのは海洋学科(Oceanography)であろう。地理的な条件が必要を生み、利点にもつながっているにちがいない。海洋学研究所の助成金交付指定校で、水産技術、海洋学など、非常に有利な条件で研究を行なうことができ、人気も高いということだ。国際学科の発達も、アジアからの交通上の距離が近いという地理的条件が、多少関連しているのかもしれない。

## 2, アジアとくに中国関係の学科について

中国に関連したコースとしては、人文学部(College of Arts and Sciences)の中に、人文学系のアジア言語文化学科(The Department of Asian Languages and Literature)の中国語専攻(Chinese)、社会科学系の国際学科(International Studies)の中の中国学専攻(China Studies)がある。

アジア言語文化学科はアジア(東アジア、東南アジア、中央アジア、南アジア)の言語と文学を専門とするもので、各文化における言語の役割に力点をおくという意味で、会話、講読、文学的分析などを行なう。専攻外の学生も学べるように、英語による、アジアのそれぞれの国の文学に関する講義も用意されている。

具体的な専攻としては、アルタイ語(モンゴル語、満州語)、アジア言語学、中国語、ヒンディ語、インド語(ウルドゥ語やその他の地方語)、インドネシア語、日本語、朝鮮語、サンスクリット語、タミール語、タイ語などがある。

履修要項を見ると、単位の取り方は柔軟性に富む。1993年度の中国語関連の科目について言えば、初習者向けと既習者向けのクラスがあり、初習者は3コース(1コース5単位)を3年間で学んでもいいし、2コース分を1年間でとっ

てもいいし、あるいは主には大学院生のためではあるが、夏休みの集中講義で3年分を一度にとることも可能だ。1レベル、2レベルでは基礎を勉強し、3レベルになると、実用会話、講読、ビジネス中国語、文法論など、ポイントをしばって学ぶ。3レベルにはまた北京大学での8週間の研修がおかれていて、対応する通常授業3つ分の単位がえられる。内容は北京大学の専門スタッフによる6週間のクラス授業と、2週間の中国国内旅行からなっている。4レベルではさらに高度な文法や、古代漢語、現代中国文学の講読などを行なう。特殊研究や卒業研究のクラスもある。

卒業のための必修単位は、語学が55単位、(そのうち10単位は古代漢語を含む3レベル以上)、文学10、言語学3、地域関連の人文あるいは社会科学科目の中から5、文学あるいは関連の人文あるいは社会科学科目2単位で、合計75単位となる。

なお、このうえさらに大学院があって、いっそう充実したカリキュラムが用意されているようだが、ここでは割愛する。

国際学科には、カナダ学、中国学、比較宗教学、国際学、日本学、ユダヤ学、朝鮮学、ロシア・東欧学、南アジア学などの専攻がある。

中国学専攻は、中国人および中国文化、歴史的発展、時事問題などに関する広範な理解を目的とし、歴史学や社会科学に力点をおいている。専門については、2レベルまでの中国語(30単位)に加え、現代中国コース、前近代中国コース、中国文学・芸術コースのいずれかを専攻し(25単位)、専門的な研究を行わなければならない。(10単位)。

教養的な科目については、1レベルでは現代中国社会の概略、2レベルでは儒教に代表される中国文明史について学び、4レベルになると、アジアにおけるマルクス主義、中国伝統社会論、現代中国社会論、中国の宗教、東南アジアの政治的発展、中国経済論、中国少数民族など、非常に多彩な科目がおかれている。4レベルではまた、特殊研究や卒業研究のクラスもある。

### 3. B助教授とのインタビュー

今回、知人の紹介で、アジア言語文化学科のB助教授（中国語、中国文学担当）から話をうかがうことができた。ちなみに語学、文学、歴史、哲学など、同学科関係のスタッフは、教授から講師まで10名くらいいるが、半数は中国系のような。B氏のように、東洋系でない人が中国語を専門とするのは、漢字の問題など困難が多いことだろうと思っていたら、流暢というのを通りこした、こなれた中国語を話すのに驚かされた。学校などで習った場合の生硬さがないうえに、ものの言い方が妙に懐かしさを感じさせる。しばらく話して気がついたが、現在の標準語のなかでふつうに使われる社会主義的語彙が少ないのである。やがて分かったことだが、15歳までを人民共和国成立以前、いわゆる解放前の中国で過ごしたということであった。B助教授の略歴は以下のようなものである。

- 1935年 1歳半の時に、宣教師だった父親に連れられて北京へ、やがて内陸の湖南省長沙、さらに同省内の奥地に移り住む。
- 1949年 湖南省の沅陵という所で中華人民共和国の成立を迎え、帰国。
- 1965年 ピッツバーグ大学でM・Aを取得。
- 1973年 スタンフォード大学でPh.Dを取得。
- 同年 ワシントン大学へ。中国語および中国古典文学の原書講読や現代中国文学の講義を担当。

ちなみに、80年代半ば以降は数年おきに中国を訪れ、とくに3年前の時は、かつて自分の住んでいた湖南省の奥地の町に行くことを許されたという。少数民族の多いその地域は、叙情的な作品で日本にも愛読者の多い作家沈從文（1902～1988）の故郷として知られる。現地にある吉首大学には沈從文研究所ができていて、B氏も連絡があるようだった。

B氏の専門は、唐から清の、いわゆる近世小

説である。中国語文化学科には語学3人、文学3人の教授、助教授がいるが、現代文学の講義ができるのは、B氏のみということであった。20年前に赴任したあと、最初は4レベルの語学の教材として、現代中国文学のアンソロジーを使う程度であった。それには魯迅、巴金、老舍、茅盾、丁玲、冰心、沈從文、張天翼といった、現代文学を代表する作家たちがとりあげられていた。一方、必修教養科目として中国文学史があったが、10週のうち3、4回が現代に当てられればよいほうで、とにかく現代文学が不十分であるという思いをいつも抱いていた。

文化大革命後の中国文学の状況からしても、近年とみに現代文学を講ずることの必要性を感じ、学科内で主張し続けた結果、現在では1年3期のうちの1期を、現代文学に使うことができるようになった。それで、氏は1910代後半の文学革命、五・四運動から始まる中国現代文学史を、人民共和国成立以前（ふつう狭義の現代文学と称される）と以後（中国では、“当代文学”と呼ぶ、いわば同時代文学である）に分け、さらに文化大革命終結後の文学（一般に新時期文学と呼ばれている）を、短篇小説の受賞作品を中心に、台湾文学と合わせて講ずる、という3本の柱を作った。それぞれ1年（すなわち1学期）に1本づつこなし、3年間で一巡するようになっているという。

また年によって、4レベルで現代文学のゼミを開くことができる。学生は多い時は8名、少ない時は1名、前回は4名だったとか。そこではかれらが自分で研究できるように、方法論、とくに調査の方法などを中心に講ずるようにしている。アンソロジーの中から1人の作家を選び、さまざまな視点から読んでみる。そしてその焦点のあて方などについて指導する、ということであった。

### 3. 関連図書館の沿革とその意義

ワシントン大学には、建築物としても美しいことで有名なスザロ図書館や、アレン図書館、

オディグラント地下図書館など、図書館がいくつかもあるが、アジア関係の図書はほとんどゴーエン・ホールという建物に集められ、中国関係の図書はその中の東アジア図書館に納められている。ちなみにアジア言語文化学科の教員の研究室も、同ホールの中にある。

東アジア図書館の今日に至るまでの経緯は以下のようなものである。

- 1937年 ロックフェラー助成金により、中国文学関係の図書を少数購入。
- ～1940年 コロンビア大学からの寄付、2000冊。ロックフェラー助成金による購入の継続⇒20800冊に。
- ～1945年 スザロ図書館の東洋研究室の一隅におかれ、学生、教員の希望者のみに貸し出し。
- 1946年 極東研究所の設立に従い、トムソン・ホールの地下に移されて、極東図書館となった。  
(第2次世界大戦中、朝鮮語指導のための軍の特殊訓練プログラムから、自然に朝鮮関係の蔵書の中核ができていた)
- 1948年 ジョージ・カー (Kerr) の蔵書を入手したことにより、日本関係の蔵書が増加。  
引き続き、ヘルベルト・H・ゴーエンおよびジョセフ・ロックの蔵書の入手により、中国と内陸アジア関係の蔵書の充実をみる。
- 1960年代 中国の古典に関するヘルマット・ウィルヘルムの蔵書および日本美術の資料に関するロバート・ペインの蔵書が加わる。
- 6、70年代 大学側のテコ入れ。フォード、ロックフェラー、メロン、日本財団などの助成金。米教育省の援助。個人的な寄贈など多々。
- 1976年 蔵書がそっくりゴーエン・ホールに移され、現在の東アジア図書館となっ

た。

現在 蔵書36万冊。(詳しくは別表参照)  
内容は、中国語、日本語、朝鮮語、チベット語、満州語、モンゴル語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語の書籍。その他欧米の言語による社会科学、人文科学、東アジアに関する図書。

こうした沿革の背景の意義について、同図書館の関係者は以下のように述べている。

1937年の東アジア図書館の開設は、その後ワシントン大学がアメリカにおける中国関係の教育(語学、歴史、文化など)の中心点のひとつとなるための、基礎となった。第2次世界大戦の間に、中国とドイツから著名な学者たちが同大学に移ってきて、もともからいたスタッフとともに、強力な研究陣営を作りあげた。1950年までには中国研究の最強プログラムが完成。元来が中国書の収集から始まったということもあって、蔵書の半数が中国書であるという状態が続いている。

日本書も1960年代には国内有数のものとなり、1972年に100万ドルの日本基金の投与があつてからは、いっそう強化された。朝鮮語の蔵書の充実ぶりは、議会図書館、ハーヴァード大学に次いで、第3位にある。チベット書も少なくない。これら原書に加え、欧米の言語による東アジア関係の人文科学書の購入数も多い。近年は、図書館のスタッフが直接これらの国々へ出かけて行って購入するケースが増え、たんに資料収集という意味ばかりでなく、アジアの出版事情を理解するという意味でも、大きな成果をあげている。(同図書館提供のリーフレットより。概略のみ)

なお、最近の蔵書数その他については、別表のとおり、他大学と比較できるように、主要大学の一覧表にしてみた。原資料など図書館関係の資料の収集に協力してくれた中年の男性司書

は、同大学の卒業生で、日本文学専攻。江戸時代の小説が研究テーマだったということである。

## 5. 総括

今回、ワシントン大学の書店をのぞいたり、ロス・アンジェルス市内やカリフォルニア大学を訪れてみて、共通して印象的だったのは、韓国の台頭である。ロス・アンジェルスの市民社会でのそのことは、日本でも話題になったりしたが、学問の世界というか、研究教育の場でもそのことは同様に言える。直接の関心事ではなかったので、詳しく検討したわけではないが、筆者が3年前にワシントン大学で同じような場面にあったときと比べ、韓国関係の一般書もずっと増えているし、大学で使用するテキストも、人文、社会、自然科学の多岐にわたって、用意されていた。

図書館については、中国でも同じような印象を受けたことがあるが、日本ほど個人が多量の蔵書をもつという志向がないため、図書館そのものがたいへん充実している。そして中国と異なるのは、非常に開放的で、部外者に利用しやすいということだった。司書(Librarian)は専門職として地位も高いそうだが、どこの図書館でも親切にされ、疑問に対しては懇切丁寧に答えてもらった。

日本(語)の中国研究の著作もかなり収集されていて、いったいに中国書、日本書、韓国書などはだいたい書架が近いものだから、ややもすると日本のどこかの大学の、中国研究室にでもいるような錯覚にとらわれたりした。書籍はおおむね同一作者の著作をまとめて、アルファベットの順など一定の概念に沿って並べてあるのだが、いずれの大学でも、時々同一作者の本がとんでもない(と筆者には思われる)ところに組み入れられていて、理解に苦しむようなことがままあった。そのために予想外の収穫もあったりしたが。

ところで、筆者の専門が現代中国文学ということもあって、あらかじめ学内の同分野の研究者との接触を希望し、情報交換や内容的交流も考えていたのだが、本報告の2、3で述べたような事情で、他大学のちょっとした情報や、アメリカで出されている英語の研究会誌の紹介を受けるにとどまった。しかし逆にいえば、これは少数のケース(個別的な事情で、以前から台湾や香港からの研究者の往来があり、現代中国文学研究の拠点となっているような、たとえばコロンビア大学とか、カリフォルニア大学バークレー校のようなところ)をのぞいて、一般的な総合大学におかれたアジア、厳密に言えば中国関係の研究教育機関の実態を知ることになったのではないかと思う。

中国文学の研究教育の現場で、古典が優勢というのは、かつて台湾へ行ったときも関係者から聞いたことである。その理由としては、学問として体系化していて範囲も広く、テーマが無尽蔵であること。評価が定まり、良きにつけ悪しきにつけ、尺度が取りやすいこと。現代社会や政治と直接の関わりが少ないから、いろいろな意味で安全であること。中国現代史の一時期、同時代文学の不毛が言われ、現代中国文学をとらえるうえで空白の部分があること等など、いろいろあげられようが、中華人民共和国の成立以来、開放政策が本格的になる1980年代半ばまでの歴史的必然の結果、アメリカの大学における中国研究およびそれに関わる教育が、台湾や香港のそれらを強く反映しているのは、当然のことといえるだろう。

ひるがえって日本のことを考えると、地理的文化的近さのゆえに、これらに比べやや早く、現代文学への傾斜が強まってきているように思える。その成果としての学会報告や学会誌での論文発表はまだまだ少数であるが、民間の研究会や一般の刊行物での現代(同時代)中国文学の占める割合は増加しつつあり、それに加えてテレビや映画などのメディアを通じて、現代中国文学に接する機会も増えている。そして大学の授業などでも、同時代文学の作品が積極的に

論じられ、従来の社会主義文学論にとらわれない文学史観による、現代中国文学史のとらえ直しなども試みられている。

最近アメリカに長期滞在し、現代中国文学研究の動向を視察してきた、日本のある研究者の報告によると、近年その分野では、台湾や香港で欧米文学を学び、アメリカに行つて中国文学の研究に従事している中国系研究者の活躍に目覚ましいものがあるとのこと。もともと歴史文化の共有や戦争責任の問題など、メンタルな干渉要素のより少ないところにあり、漢字を共有しないがゆえに、純粋な伝達手段としての中国語を媒介として現代中国文学に向かうことのできるアメリカでの研究は、こうした精鋭の在米中国系研究者の先導を得て、日本のそれとは異質の果実をむすびつつあるのかもしれない。これらは今後、日本人学者による欧米、場合によっては香港、台湾での現代中国文学研究を通じて日本にも流入し、最終的には中国大陸をも含めた還流を形成して、それぞれの領域をうるおしていくのではないかと思う。

このようなわけで、今回、現代中国文学研究の面での具体的な交流は果たせなかったが、教育面では示唆を受けることが多かった。まず語学の学習方法の多様性、言葉をかえて言えば、単位の取得の柔軟性である。初習者と既習者のそれぞれに見合ったクラスが用意され、さらに細かな選択肢さえおかれていた。北京大学での8週間の研修の扱いについても同様だが、そもそも単位取得の方法が積み重ね方式で、他大学との互換性も高いというアメリカの大学では、そう特別なことではないのかもしれないが、考えさせられる事柄であった。

B助教授と対談中、東洋系の小柄で愛くるしい女子学生が、研究室を訪ねてきた。9月からの新学期に向けて、氏の授業の内容を問い合わせに来たらしい。筆者はまもなく辞去したが、納得のいくまで話し合おうとしている教師と学生をみていると、授業ひいて言えば学問とは、「共同で作りに上げていくもの」という思いを強くしたのであった。

本報告の作成にあたり、ワシントン大学のFrederick Brandauer先生、Charles Frey先生、共栄学園短期大学のNicoles Bufton先生のご協力があったことを、感謝をこめて付記する。

#### 主な参考資料：

- 1) 《UNIVERSITY OF WASHINGTON BULLETIN》1993
- 2) 《Committee on East Asian Libraries BULLETIN》No. 98, Feb 1993, The association for Asian Studies, Inc.

別表1 米主要図書館における東アジア関係資料収集の現状：1991/1992

その1 資料数について（1992,6,30現在）

（各項とも上段は中国関係 下段は日本関係）

図書館	原書数	マイクロフィルム マイクロフィッシュ	逐次刊行物 定期/不定期※①	新聞	蔵書数	1991,7~92,6 入手図書数
カリフォルニア大 バークレー校	306,032	15,358	1,873	56	654,403	7,083
	292,252		1,831	10		4,711
カリフォルニア大 ロスアンゼルス校	172,732	6,580	1,538		319,613	9,374
	123,501		939			3,439
シカゴ大	306,167	20,117	1,450/4,721	43/30	486,022	4,828
	147,451	2,447	1,832/3,875	16/110		3,323
コロンビア大	273,306	15,205	2,004	24	578,116	7,406
	211,991	5,860	985	12		5,982
ハーヴァード大 イェンチン図書館	446,276	32,044	2,176/3,483	166/275	757,524	5,373
	214,643	20,104	1,099/3,153	7/19		5,180
ハワイ大	111,375	7,036	973/1,933	13	263,447	4,757
	107,138	8,548	691/1,682	5		2,983
フーブァ研究所	203,929	28,182	811	34	336,976	1,995
	138,152		236	11		3,110
イリノイ大	120,754	10,000	367/1,000	9	189,939	3,700
	52,690	550	264/400	3		258
議会図書館アジア部	612,097	16,175	2,316/9,402	41/1,179	1,516,603	13,021
	760,032	21,969	4,021/16741	11/54		15,685
ミシガン大	276,832	43,967	935	64	544,401	9,576
	222,033	14,209	1,638	12		7,182
オハイオ州立大	93,375	9,410	523	29	167,143	3,656
	52,999	10,132	456	5		9,716
ピッツバーグ大	119,225	3,209	681/601	56/93	154,034	2,923
	29,336	970	309/8	4/5		1,345
プリンストン大	329,850	22,537	1,620	11	491,802	8,603
	124,644	3,776	1,201	4		5,774
ワシントン大 東アジア図書館	200,396	8,399	1,119/2,063	50/154	364,966	7,339
	103,113	5,859	865/1,060	10/49		3,126
ウィスコンシン大 マジソン校	93,128	0	301/0	4	194,804	2,337
	51,676	0	172/0	2		1,119
イェール大	347,136	6,163	1,153	29	528,173	9,947
	183,974		1159	6		5,221

※①単一の数は定期

別表2 米主要図書館における東アジア関係資料収集の現状：1991/1992

その2 運営費および人員について

図書館	運営費会計	割当金	寄付	補助金	東アジア・プログラム助成金	専門職	事務職
カリフォルニア・バ校	\$ 510,203	\$ 350,628	\$ 104,372	\$ 14,815	\$ 40,815	7	8.5
カリフォルニア・ロ校	\$ 317,857	\$ 268,857		\$ 33,000	\$ 16,000	6.5	12
シカゴ大	\$ 254,004	\$ 136,158	\$ 46,379	\$ 47,472	\$ 24,000	5	11.4
コロンビア大	\$ 471,286	\$ 345,927	\$ 77,416	\$ 13,343	\$ 34,600	9	14
ハーヴァード大	\$ 469,271	\$ 16,948	\$ 169,876	\$ 272,934	\$ 9,513	12.86	22.7
ハワイ大	\$ 292,954	\$ 231,741	\$ 18,566	\$ 42,647		6	2
フーブア研究所	\$ 260,700	\$ 240,700		\$ 16,000	\$ 4,000	6	10.3
イリノイ大	\$ 86,008	\$ 79,708	\$ 2,300	\$ 4,000		2	3.5
議会図書館極東法律部※②	\$ 40,000	\$ 40,000				6	1
ミシガン大	\$ 479,002	\$ 429,617		\$ 49,385		7	6.75
オハイオ州立大	\$ 195,522	\$ 97,417	\$ 29,000	\$ 17,305	\$ 51,800	4	2.5
ピッツバーグ大	\$ 248,678	\$ 164,209	\$ 5,468	\$ 3,000	\$ 7,600	4	4
プリンストン大	\$ 483,648	\$ 352,529		\$ 47,119	\$ 84,000	7	13.5
ワシントン大	\$ 244,337	\$ 191,737		\$ 15,740	\$ 36,860	6	10.5
ウィスコンシン大	\$ 120,005	\$ 120,005				3	2
イェール大	\$ 332,658	\$ 307,658			\$ 25,000	7	10.7

※②該当項目に関しては、アジア部の報告なし。

◎別表1, 2とも、参考資料(2)(Committee on East Asian Libraries BULLETIN)No.98より、蔵書数15万冊以上の図書館、関連項目のみを抽出、合成した。